

## 「富士登山競走に参加して」

青森県 佐々木一成

☆成績：山頂コース：優勝1回

第40回（1987年・S62年）2時間48分19秒

「富士登山競走」を、振り返ると私なりのシュプールを残せたかなと感じております。早いですね30年も前になりますか。

私は、もともとクロスカントリースキー選手でしたのでトレーニング自体が、不整地や山間を走ることが多く、富士登山競走（高所）に抵抗がなかったと思っています。特に学生時代、新潟県妙高高原町（現.妙高市）池の平でよく合宿を行っていました。宿舎の目の前には、北信五岳の一つである妙高山（2454m）周辺は、クロスカントリースキーのトレーニングには、最高の場所であり、私のトレーニング場所のひとつでした。

宿舎（池ノ家）の主をしたい、多くのスキー選手が集まり、いろんな情報がたくさん集まっていました。そんな中、毎年7月25日（当時）に「富士登山競争」があることを知りました。他のスキー選手も参加していたこともあり、力試しのつもりで、気軽に出場したような記憶があります。

私は、スキー仲間にも恵まれ、給水や順位・タイム差などを教えてもらうことでレースに集中できたと思っています。

富士吉田市役所から馬返しまでは、登りとは言え舗装道路を走るため、当然、陸上選手が有利で、大学の陸上選手などが馬返しぐらいまで上位にいたように記憶しています。離されないように、5合目までは我慢のレース、6合目以降が勝負と考えていましたので、仲間からの情報を聞き、ただひたすら前の選手に追いつくだけ。

大学2・3年の時？、5位に入ったと記憶していますが、7合目以降は目の前の選手を抜きたくとも、抜けない状況に驚きました。走路は険しいし、脇を抜かすこともままならない状況。8・9合目あたりになると疲労から、足が痙攣し、コントロールができない状態を経験したことが、後のレースに参考になったことです。

そんな中、思い返すと「幻の優勝（失格）」と「夫婦での優勝」ですかね。

社会人（1985年）となり、高所でのトレーニングも増え。富山県立山（標高2400m）でのスキートレーニングや、雄山（3000m）までのウォーキングなどを重ねることで、高所に対応した体ができたと自信を持って臨みました。しかし・・・調子が良かっただけに、落とし穴に気付かずに・・・。

1985年7月25日早朝より晴、富士吉田市役所をスタート。馬返し、5合目を無難に通過、30番手ぐらいだったかなと記憶しております。トップ選手とのタイム差を聞き「行ける」と思い、ひたすら前の選手を抜き、あと何人と順位を数え、7合目あたりではトップにたったような気がします。その後は、自分のペースでゴール。祝福を受けましたが……。ゴール後、競技役員から電話連絡があるということで、電話に出たところ、競技委員長（市長？）より「スタート前のコール（チェック）」を受けていないとの理由で「失格」を言い渡されました。

幻の2時間39分台だったかな？（今は2時間20分台でしたか）その時は、さほど悔しいという気持ちより、速く下山しなくては、という気持ちが優っていました。感傷にひたる余裕もなく、下山し帰路に着きました。やはり、戻ってから悔しさが湧いてきたようなことを記憶しています。

次は、1986年は、中島和子（佐々木和子）に9合目で抜かれ、総合3位。

1987年、結婚し参加。記録は平凡でしたが、「夫婦での優勝」ができました。ご協力いただいた仲間にはほんとうに感謝でいっぱいです。遅くなりましたが、大会関係者にも感謝申し上げます。

今となっては、「失格」と「夫婦での優勝」は、いい思い出であります。

夫婦での優勝後は、残念ながら「富士登山競争」には、参加することもなく今日に至りました。田舎では、富士登山競争を知らない人の方が多いと思います。

現在は、世界中に新型コロナウイルス感染症が拡大し、人の集まることが懸念されておりますが、一刻も早く新型コロナウイルス感染症が終息することを願うとともに、日本一の「富士登山競走」が関係者のご尽力により、安全・安心な大会が末永く長く開催されることを心よりご祈念申し上げます。

（令和3年6月30日記）

☆元クロスカントリー選手。冬季オリンピック4回出場、1992年アルペールビルオリンピックでは選手団主将を務める。全日本スキー選手権大会では個人四冠を3度達成するなど通算26勝（歴代1位）を記録した。（ウィキペディアより）

記録について、中島和子と佐々木和子は同一人物ですので佐々木和子の後に（旧姓：中島と記載いただければと思います。）